
ヒーロー&ヒロイン

こーた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー&ヒロイン

【Nコード】

N4142T

【作者名】

こーた

【あらすじ】

正義の味方の要請を主な目的とした日本政府立「正称高校」正称高校の1年生である主人公楯河遼はある日出会った少女により、その人生を大きく変えさせられるのであった。

1 限目 出会い&契約

その日は珍しく目覚まし時計よりも早く起きた。いつもは目覚まし時計に起されるというのに。

今考えれば、目覚ましよりも早く起きたのは運命だったのかもしれない。

＊

高校1年になってはやくも半年がとうとうとしている朝、一人の少年が目覚ましよりも早く起きた。それはめったにないことで、何もなかった星に生命が芽生えた並の軌跡である。

その少年の名は楯河遼^{たてがわりょう}。政府立「正称高校」の1年である。政府立というのはそのままの意味である。政府がこの高校を立てたのだ。

「正称高校」は普通の高校ではない。正義の味方を育成する高校なのだ。

正義の味方を育成すると言っても、全員が正義の味方になるとは限らない。SPになるもの、スパイになるもの、正義の味方になるもの、格闘技のチャンピオンになるものと、さまざまである。

遼は制服に着替え、1階に下りた。遼は一人で1件屋に住んでいる。肉親はいない。父親は遼が10歳の時他界し、母親は行方不明。

遼は自分でパンを焼いた。なんとなくつけたテレビでは最近起きたバスの銃撃事件の報道が流れている。

「ぶっそうなこった。ここらへんだよなー この事件」遼はテレビを見ながらつぶやき、パンをかじる。

パンを食べ終わると、遼はテレビを消して鞆を持った。そして部屋の奥にある父親の仏壇に「親父。いつてきます」と言って家を出た。

近くのコンビニで雑誌1冊とメロンパンを買い、いつもよりも早くバスに乗った。時間が早いせいかバスには制服姿の少女一人、老婆一人、サラリーマン風の男性2人が乗っていた。

遼は窓側の席に座り、雑誌を広げた。雑誌には先ほど見たニュースがでかかと載っている。

「あ」遼はそのニュースの記事を見て声をあげた。

「この襲撃されたバス……。俺が昨日逃したバスじゃねーか。」
遼は今頃気付いた自分のラッキーさに少しうれしくなったが、同

時に自分が危険にさらされていた事実になんとも身震いした。

ふと窓の外を見つめると、そこには車道に対して平行に並ぶ黒いスーツの男たちがいる。

「！」
遼はスーツの男たちのこちらに向けた手元を見て、叫んだ。

「伏せろー！ー！ー！ー！ーっ！」 その言葉と同時に、男たちの構えていたマシンガンが火を吹いた。

バスの窓が粉々に割れ、周りに銃弾がバスの車体に当たることによっておこる金属音が響く。サラリーマン風の男性が一人銃弾を浴び、血を舞わせながら倒れる。遼は舌打ちをした。

「銃撃事件は昨日だけかと思ったが、今日もか。一体誰だこんなことをしやがるのは」 遼は学校から常備を命令されている拳銃を出した。しかし、マシンガンの弾はやむことなく続き、出る暇がない。

その時、先ほどの制服姿の少女が立ち上がった。少女の隣にはガラスの刺さったメロンパンが転がっている。

「オイ！ 何やってんだ。お前！」 遼は必死になって声をかけた。少女はバスの座席を無理やり引きちぎり、スーツの男たちの方向を見ていった。

「私の朝食のメロンパン……どおしてくれんのよおおお
！」少女は怒り、座席を投げた。

座席は大砲から発射されたようなスピードで男たちに飛んだ。しかし座席は男たちの構えるマシンガンによりハチの巣にされる。その一瞬で少女はバスから飛び降りた。

そして近くにあったガラスの破片を手に取り、男たちに向かって投げた。ガラスは1人の男の構えているマシンガンに刺さる。マシンガンは爆発し、男は吹き飛んだ。近くにいた男たちは散らばり、銃を撃ったまま走る。近くの歩行者たちが銃弾を受け、次々と血を吹き、倒れる姿を見て、遼は歯を食いしばった。

少女はガラスの破片を手に取り、素早く移動した。そして1人の男に近寄り、ガラスの破片を腕に突き刺した。男は腕を抑え、後ろに引いた。地面に銃が落ちる。

少女は銃を拾い、後ろのスーツの男を発砲し、残りの男3人に銃口を向けた。1人の男は銃弾を受け、倒れるが、2人の男はなおも銃撃を続ける。少女は銃を男に向かって投げた。男に車よりも早いスピードで銃は飛び、顔に当たった。鈍い音と共に男は倒れる。

その時、もう一人の男が少女の後ろをとった。少女は「しまった！」

と言って振り返る。男は引き金に力を入れる。

発砲音と共に、男は倒れた。少女がバスの方向をみると、遼が片手で銃を構えていた。銃口からは白い煙が出ている。

「大丈夫だったか？」 遼は声をかけた。少女は深い緑色の目で見つめる。髪の色は黒だが、目は深緑。遼はその少女の不思議な容姿に吸い込まれそうだった。

「大丈夫」そう言って立ち去ろうとする少女に遼はあるものを投げた。少女はうまく受け止め、渡されたものをまじまじと見つめた。

「メロンパンだ。さっきメロンパンがどうかいってたよな。やるよそれ」 遼は笑顔で言った。少女は「ありがと・・・」と不思議そうな顔をして礼を言って立ち去った。

「あーあ。せっかく早く学校に行こうと思ったのに、このせいで完全に遅刻じゃねーか。しかも警察なんか来たら遅刻どころか欠席だぜ。単位逃しちゃうのだけはいやだな。逃げるか」 遼はボロボロになった雑誌と、土埃だらけの鞆を拾い、歩いて立ち去った。

後ろではパトカーのサイレンが響いていた。

学校に着くと、遅刻の理由を問われた。遼は「殺されかけてまし

た」と言ったが先生はあいまいな返事で返し、バケツを渡した。

「ろーかに立ってろ」

遼は水がたっぷり入ったバケツを両手に持ちながら眠っていた。この時間では眠っていても誰も怒らない。

遼がぐっすりと寝ていたその時、遼の顔に水がかかった。

遼が豆鉄砲を喰らった鳩のような顔で状況を理解した。頭から水が垂れ、その水が水をかけた犯人の顔についた。

「これ！賞味期限切れてるんだけど！！！」 犯人はメロンパンの袋を遼に突き付けた。

「あらら。さっきの最強少女じゃん。なに？おんなじ学校だったの？クラス違うから全然知らなかった」 遼は顔を拭きながら言った。

「そーよ！ 私も知らなかったけどね！」 少女は遼の生徒手帳を奪った。

「へー遼って言うの。じゃあ遼！ 私はカファロⅡ花蓮。イタリアと日本のハーフ。カレンって呼んで！」

「だからおかしいのか」 遼はだるそうな顔で言った。 カレンはむっとする。

「おかしいって何よ！」

「目の色と髪の色。あってない」

「仕方ないでしょ！ この学校染めちゃ駄目なんだから！」

「そーだね」 遼は濡れた頭をかいた。

「何その態度」 カレンは怒るが、遼はいつさい気にせず、大きなあくびをした。

「昼間の連中。 あれ何？」 カレンはいきなり真面目になって話を始めた。 遼も顔を真面目に変える。

「さあな」 遼は答えた。

「最近ここらを騒がせてるテロ集団じゃねーの？」

「違うわ。 私見たの、あいつらの肩にあったマーク。 あれはイタリアの超有名マフィアのマーク。 テロリストじゃない。」

「なんでそんな奴らがこんなことするのかね」

「あんた。父親の名前は」

「楯河卓」遼は思ってもみなかった質問に驚きながらも答えた。

「たてがわすぐる！？」 ああの第4次世界大戦を止めた！？」

「ああ。知ってるのか？」 遼は不思議そうに問いた。

「知ってるにきまつてるでしょ！ 超有名人よ。その息子があんただなんて……。で、いまその卓さんはどこにいるの？」

「死んだ。俺がガキの頃。いきなり家が襲撃された。んで、俺をかばって死んだ。まったく最後まで勇敢なヤローだったよ。」 遼は数歩先の窓を見つめていった。カレンはやっぱりと言って目を閉じた。

「おそろく……。そいつらよ、今回の犯人。あの時は私はイタリアにいたの。で、丁度その時にその話を聞いたの。卓がどーのこーのって」カレンは目をゆっくりあけながら人差し指を空中でくるく

る回しながら言った。

「で？そいつらが何だって？」 遼は制服をパタパタ乾かしながら聞いた。

「多分あの時に遼も殺したと思ってたんでしょね。で、最近になってなぜか遼が生きてることが解って、殺しに来た。 そうだと思うの」

遼はこの時にあることを思い出した。

（そうか……。俺があ那時に乗り遅れたバスが狙われたのもそのせいか。俺がそのバスに乗ってると思って・・・）

「とにかく、あんたひとりでは危険。 遼、私のヒーローになりなさい。」 カレンは遼を見つめるといふより、睨むと言っている目で言った。目以外は絵画のように冷たい。恥じらいも何もない表情だ。ちなみにヒーローというのはつまりパートナーのような存在だ。この学校には、ヒーロー＆ヒロインという契約を結び、活動する場合と、そうでない場合がある。特に組まなかったとしても何もないが、行動範囲や作戦スピードが速くなるなどのメリットはある。

「お前がヒロインになってくれると？」 遼は答える。

「そうよ。私もさっきのマフィアにちょっと関係があつてね。あんたというと好都合なの」カレンは手を差し出した。

遼はだるそうにその手を握った。

「よろしくな。ヒロインさんよ」

「交渉成立ね。うわっあんたの手、濡れてる！」カレンは手を引く
込めた。

遼が「誰のせいだと思ってるんだ」と、笑った時、遼の隣の扉が勢
いよく横にスライドした。

「授業中だアアアアア！ 静かにしやがれエエエエ！」 先生
の大きな怒鳴り声が廊下どころか学校中に響いた。

まだ二人は知らなかった。この契約が、来るべき嵐の始まりだった
ことを。

ヒーロー&ヒロイン 第1限目 出会い&契約 完

1 限目 出会い&契約（後書き）

別サイトでは緋弾のエリアに似てると叩かれました。
似てますか？

2 限目 質問&驚愕(前書き)

あだ名 遼 (主人公。ヒーロー)

楯河遼 16歳。政府が運営している正称高校の1年生。第4次世界大戦を止めた英雄楯河卓を父に持つ。母親は行方不明。めんどくさがり屋だが、正義感是谁よりも高い。銃の腕はかなりのもの。

あだ名 カレン (ヒロイン)

アフアロⅡ花蓮

16歳。政府の運営している正称高校の1年生。父親は総理大臣であり、正称高校の校長でもある。母親は遼の父親を殺したマフィアのボス。

イタリア人と日本人のハーフ。髪は黒いが、目は深緑の不思議な容姿をしている。

メロンパンをこよなく愛する。おもに剣を使って戦い、銃はあまり使えない。肉弾戦も得意。だが運動は嫌い

2 限目 質問&驚愕

遼は業後、コンピュータ室に向かった。カレンと待ち合わせしたからだ。クラスの違う二人は教室で会話することが出来ないのだ。

遼が時間ピッタリにドアを開けると、カレンが教師用のパソコンでなにかを調べていた。遼は足を忍ばせながらカレンに近づき、「わっ!」と、驚かせてみた。カレンは驚きで飛び上がり、そのあと遼の眉間に剣を突き付けた。

「びっくりして死ぬかと思ったわよ。馬鹿!」 椅子の上でカレンは顔を赤らめながらも、遼を見下しながら言った。

「すまんすまん。まあそうカツカするなよ。ただのいたずらだから。まさかそんなに驚くとは思わなかった」遼はニヤニヤしながら謝った。カレンはフンと鼻を鳴らし、剣を鞘におさめた。

「で? なんの用だったかな?」 遼はパソコンの画面をのぞいて言った。パソコンの画面にはイタリア語でつらつらと文章がつづられていた。

「これだ。君の父親、マフィアと色々関係があるらしいからな。このパスワード、知らないか?」 カレンはパソコンの画面に表示

されている四角い枠を指差して言った。

「知るわけねーよ。 そんなの」 遼は頭をかきながら言った。 カレンは残念そうな顔を見せたかと思うと、「役立たず」と呟いた。 遼は面倒なので反応しなかった。

カレンは頭をフル回転させ、自分の記憶の中で当てはまりそうなパズワードを探し始めた。 遼はその姿をただ意味もなく見つめていた。

「あのさあ」 遼は暇になったのか何となく疑問をぶつけた。「お前の両親は？ 俺は二人ともいねーんだけど」

「父親は総理大臣。」 カレン隠す事もせず普通に答えた。

「は！？ 総理大臣っことはこの学校の校長か？」 遼は目を丸くして言った。 カレンはうなづく。

「じゃ・・・じゃあ母親は？ 母親はどうしてるんだ？」 遼は問いたがカレンは答えなかった。

「話したくねーってか。 じゃあ別の質問だ。」 遼はいつの間にか質問を考えていた。

「お前。俺を狙うマフィアを追ってるとか言ってたよな？なんでだ？」

「ある人を探してる」カレンは控えめに言った。その姿は余計なことを言わないようにしているようにも見えた。

「そいつが母親か」遼は勘で推測した。カレンはビクリとした。

「まさか母親がマフィアのボスじゃねーだろうな」遼はさらに勘を働かせたカレンはキーボードのタイプする手を止めた。

「なんでわかった」カレンは小さい声で言った。遼は勘だ、と笑って言った。

「私の母は今朝あんたを狙ったマフィアのボス。前までは連絡が着いたんだけど、最近連絡が無いの。だから母の現状を知るためにあのマフィア達を追ってるの」

遼はふーん、と曖昧な返事をした。カレンはため息をついてまたタイピングを始めた。

（つーことは親父はカレンの母ちゃんに殺されたっつーことか。）
遼は近くの机に頬杖をついてそんなことを考えた。

（敵を打つ気にもならねえな。こんな化物とやり合ったら勝てそうにねえしな）遼は次第に睡魔が近づいていることに気がついた。

「じゃ俺帰るわ。暇だしな」遼は鞆を持ち上げた。カレンが鞆を掴む。

「メアド教えて。お互い何か分かったことがあったら報告出来るでしょ？」カレンは携帯を出した。遼も携帯を出し、メールアドレスの交換をした。

遼は適当に挨拶し、帰宅した。帰宅時にはマフィア達に襲われることはなかった。

遼は家に着き、父親の仏壇に出向いた。隣には両親が写った唯一の写真が写真たてに飾ってある。遼は線香をあげようとマツチに火をつけ、線香に点した時だった。

灰が落ち、遼の手にかかった。遼が反射的に手を引っ込めた時、手が写真に引っ掛かり写真立ては倒れ、割れた。

「あーあ割れちゃったよ」遼はガラスを拾いはじめ、あるものに気がついた。

写真の裏に文字が書いてある。

遼は写真を拾いあげ、携帯を手にとった。

「オイ！カレン！パスワード分かったぞ！」遼は高鳴る鼓動を押さえながら話しかけた。しかし相手の声はかわいらしい女の子の声ではなかった。

「そうか。ソレはよかった」

相手の声は変声機を使い上に何十にも重なっていた。不気味としか言いようのない声だ。遼は一瞬のうちに考えられる事態を想像した。

（誘拐だ！）

遼は落ちついて誘拐犯に話しかける。相手を刺激しないように話す、という事を学校で何度も習ったからだ。

「んで？ 誘拐犯さんよ。 目的は何だい？ カレンちゃんは無事なのかい？」 遼はメモ用紙と鉛筆を手にとった。

「ブじだ。 なんならコエヲキカせてヤロウカ？」 誘拐犯がそうしゃべったあと、かわいらしい少女の悲痛な叫びが聞こえた。

「早く来い！ 遼！ このままじゃ、わ」 電話は途中でまた誘拐犯に変わった。

「と、イウわけダ。 タスケにキタければクルガいい。 バシヨはがっこのちかくノ廃工ジヨウだ。」 それだけ言うと、電話は切れた。 遼はメモを持って、家を飛び出た。 そして自転車にまたがり、足に力を入れた。

「うらああああああああああああああああ。 待ってろよお おおおおおおお！」 この時、遼の中では父親から受け継いだ正義の心が煮えたぎっていた。 自転車はものすごいスピードで風を切り、進んでいく。

出発してから10分ほどで、学校に着いた。 バスを使うよりも早い。 遼はこれからの登校をバスではなく自転車にしようと決心し、廃工場のかたいシャッターの前に立ち、シャッターの隣のスイッチを押した。

シャッターがせりあがり、遼は転がり込み、銃を構えた。

「全員手を挙げる！ カレンは無事だ……ろ……」 遼は目の前にある現実を目を疑った。

目の前にはカレンの姿はなく、その代わりにスーツ姿の男が10人が立っていた。一番前にいる男の手にはジャミング用の機械、そして小型マイクが付いていた。

「ヒツかかったな」 男たちは一斉に銃を向けた。

「わーお。俺らの携帯の通信をジャミングして誘拐したように見せかけたのね。 さっきの声も変声機通したのか。 あーあ最悪」 遼の絶望の声が銃声にかき消された。

2 限目 質問&驚愕(後書き)

次回予告 ヒーロー&ヒロイン 3 限目 負傷&危機

マフィアの罠にはまった遼は、大きなダメージを負ってしまった。
そんな遼はカレンにあることが書かれた紙を渡す
カレンはその紙を見て、ある作戦を実行するのであった。

3 限目 負傷&危機(前書き)

あだ名 遼 (主人公。ヒーロー)

楯河遼 16歳。政府が運営している正称高校の1年生。第4次世界大戦を止めた英雄楯河卓を父に持つ。母親は行方不明。めんどくさがり屋だが、正義感は誰よりも高い。銃の腕はかなりのもの。

あだ名 カレン (ヒロイン)

アフアロⅡ花蓮

16歳。政府の運営している正称高校の1年生。父親は総理大臣であり、正称高校の校長でもある。母親は遼の父親を殺したマフィアのボス。

イタリア人と日本人のハーフ。髪は黒いが、目は深緑の不思議な容姿をしている。

メロンパンをこよなく愛する。おもに剣を使って戦い、銃はあまり使えない。肉弾戦も得意。だが運動は嫌い

前回のおさらい

ヒーロー&ヒロインという、タッグを組んだ2人。
遼はカレンにコンピューター室に呼ばれ、あるマフィアのサイトのパスワードを聞かれるも知るはずもなく、家に帰る。

そんな時、遼は家で写真楯にパスワードが書いてることを知る。
そのことを伝えようとカレンに連絡するも出たのは謎の男だった。
誘拐と思った遼はすぐに現場に向かうが、それはマフィアがジャミ
ングと変声機を使った罠だった。

3 限目 負傷&危機

スーツの男たちが放つ銃弾を遼は床に転がるように回避し、近くの鉄のコンテナの後ろに隠れた。遼は拳銃を取り出す。

「俺の持つてる拳銃だと5発実弾、1発空砲か。それが2丁だから合計10発。相手は10人……。1発でも外したらアウトだな。替えの弾もない、防弾チョッキもない、最悪だな」遼は銃を近くの木くずを手にとった。

「確実に決める」 遼は木くずを投げた、男たちの視線が一瞬木くずに向いた所で遼はコンテナの影から転がり出て、銃を打った。

合計7発が放たれ、それぞれスーツの男の胸や頭を貫いた。遼は相手の生死を気にしない。相手を殺さないように戦うなんていう情にあふれた行為は死に直結する。

遼は男たちの銃弾をよけながら1発1発確実に決めていった。

そして残りが一人となった時、男のじゅうから放たれる銃弾が遼の足を貫いた。遼は体制を崩しながらも男の下にもぐりこんだ。そして銃を構えた。

「俺の勝ちだぜ。卑怯なマフィアさんよ」 遼が引き金を引いた。

カチンという軽い音が響いた。

（しまった！ 残りの1発は朝の銃撃戦でつかつ） 遼が心で自らの失敗に気付いた瞬間、スーツの男の持つ銃から銃声がいくつものスーツ姿の死体が転がる廃工場に響いた。

＊

「遼！ 大丈夫か！ 遼！」 カレンの悲痛な叫びが病室に響いた。遼は酸素マスクや点滴を打たれながら青白い顔でベッドに横たわっている。

「一命は取り留めましたが危険な状態です。彼には合計10発、被弾してました。生きてるのが不思議なぐらいです。最悪のことも考えてみてください」 医者がそう言うとカレンは机を思いっきり叩いた。医者がびっくりしてカレンを見た。カレンの目には涙がうっすら浮かんでいる。

「タッグ組んだの昨日じゃん……。死なないでよ馬鹿……。」「
医者も残念そうに肩を落とす。そしてカレンにあるものを渡して
何も言わず部屋から出て行った。

カレンが医者からもらったのは紙と写真。いずれも血がにじんでいる。
カレンはその紙につづられている文字を見ると、病室を飛び出した。

カレンは即座に学校に向かった。カレンの行先はコンピュータ室。
授業中だったが、カレンは無理やり教師のコンピュータを取り上げ、
あるサイトを開いた。

そしてパスワードを打ち込んだ。

ブオン、という不気味なウィンドウの開く音と共に、背景が黒、文
字が白のページが開かれた。そこには銃撃事件のことや、昨日の遼
の襲撃計画がつづられている。だが、マフィアのボス、つまりカレ
ンの母親については一切書かれていなかった。

だが、カレンはある記事を見つけ、微笑を浮かべた。そしてその
ページをコピーし、コンピュータ室を後にした。

次にカレンが向かったのは校長室。つまり父親のもとに行った。今日は水曜日なのでカレンの父親は学校にいるのだ。

「おとーさん！ ちょっといい！？ 今すぐ戦闘機を用意してほし
いんだけど！」カレンは先ほどコピーした紙を隠して行った。校長
は笑顔でうなづいた。おそらく可愛い娘の頼みだから断れないとカ
レンは確信していたが、全くその通りだった。

「可愛い娘の頼みだ。ぜひ聞いてやろう。単位も心配するな」校長
はそれだけ言っていると、隣の秘書にオイ、といった。秘書はすぐに部屋
を後にした。

「お前がこんなことを言ってくるとは。おそらくオルガのことが何
かわかったんだな」カレンは小さくうなづいた。校長はにやりと笑
う。

「まあ、頑張ってこい。生憎私は仕事を放棄するわけにはいかない
のでね」その時、校長の電話が鳴った。校長は電話を取り、話を始
めた。

そして何かを確認すると、電話を閉じ、カレンの頭をなでながら言
った。

「仕事ができた。オルガは連れ戻しても連れ戻さなくてもいいが、お前のその可愛い顔はまた店に来いよ。ちゃんと自分でな」それだけ言うと校長は窓を開けた。外からヘリが近づいてきた。校長はヘリに飛び乗ると、そのまま空に消えた。

「忙しい男だ」カレンはつぶやく。その時、秘書が声をかけた。

「準備ができました」カレンはうなづいて、自分の剣をすらりと抜いた。切れ味の鋭い日本刀である。

「遼をこんな目にあわせる母親と話をしに行くか」カレンはカキン、という音を立てて、刀を鞘におさめた。

＊

カレン戦闘機に乗り、数時間空を飛び、広大な海に着いた、カレンはそこで海に浮かぶ空母を発見。そこには探し求めているマフィアのマークが刻まれている。カレンは旋回し、空母を射程距離に入れ、銃撃を開始した。甲板はパニックに陥った。カレンはそのまま戦闘機で突っ込もうとスピードをあげた。

ぶつかる瞬間にカレンは戦闘機から飛び降りた、後ろで戦闘機が爆発する。カレンはその爆煙、爆音にも動じず、可憐に立っている。

「何者だお前！　ここをどこだかわかってるのか！」スーツの男たちが銃を構えた。カレンは刀を抜き、にやりと笑った。

「母を訪ねてやってきたかたき討ち侍のカレン。可憐に参上」　柄にもないことを言ったら後悔しながらカレンは刀を構えた。

「ふざけやがって。ここは遊び場じゃねーぞ！」一人の男が叫び、銃を撃つ。カレンは剣で弾き、近くの木箱をけり飛ばす。木箱はサッカーボールばりのスピードで回転し、1直線に進んでいく。男たちがひるんでいる間に、カレンは甲板を刀で切り、穴を作って中に入った。穴の外から銃弾が飛んでくる。

（さーて。ボスの部屋はどこだ？）　カレンは壁に身体をつけ、息を殺しながらゆっくりと船内を徘徊する。スーツの男や女がワタワタと移動している。隙について近くの部屋に転がり込み、刀と苦手な拳銃を構えた。

部屋に沢山の書類が置かれている。中にはよほど大事な書類なのか、鉄の箱に入っているうえに3個もの南京錠がかかっている書類もあった。

「この中に、何かいい情報は・・・」カレンがつぶやいた時、外の廊下から声が聞こえた。

「オイ！あそこから声が聞こえるぞ！ さっきの侵入者がいるんじゃないのか！？」

「侵入者は見つけ次第殺せと指令が出ている！　すぐに片づけるぞ！」　カレンは書類に隠れようとしたが、刀が引っ掛かり隠れられない。カレンの鼓動が次第に高くなる。

「やばい」カレンはつぶやいた。　その数秒後、扉と共に男たちが銃を構え入ってきた。

「動くな！　侵入者！」　男の声が小さな部屋に響いた。

3 限目 負傷&危機（後書き）

次回予告

負傷した遼。その遼のメッセージを受け取りマフィアたちに殴りこみに行くカレン。

遼は無事に目覚めることができるのか。

そしてカレンの運命は・・・。

次回 4 限目 作戦&作戦

4 限目 作戦&作戦(前書き)

あだ名 遼 (主人公。ヒーロー)

楯河遼 16歳。政府が運営している正称高校の1年生。第4次世界大戦を止めた英雄楯河卓を父に持つ。母親は行方不明。めんどくさがり屋だが、正義感是谁よりも高い。銃の腕はかなりのもの。

あだ名 カレン (ヒロイン)

アフアロⅡ花蓮

16歳。政府の運営している正称高校の1年生。父親は総理大臣であり、正称高校の校長でもある。母親は遼の父親を殺したマフィアのボス。

イタリア人と日本人のハーフ。髪は黒いが、目は深緑の不思議な容姿をしている。

メロンパンをこよなく愛する。おもに剣を使って戦い、銃はあまり使えない。肉弾戦も得意。だが運動は嫌い

ヒーロー&ヒロインという、タッグを組んだ2人。

遼はカレンにコンピュータ室に呼ばれ、あるマフィアのサイトのパスワードを聞かれるも知るはずもなく、家に帰る。

そんな時、遼は家で写真楯にパスワードが書いてることを知る。

遼はカレンに連絡するが出たのは全く別の人物。

遼はそれを誘拐だと思い助けに行くが、それはマフィアの罠だった。遼はマフィアの攻撃で重傷を負ってしまう。

カレンは遼の病院に行き、医者から遼がかいたメッセージを受け取る。

カレンはそのメッセージでマフィアのサイトのパスワードを知り、作戦を知ったので、マフィアたちの作戦に突入するのであった。

4 限目 作戦&作戦

「動くな！」銃を構え、男たちがカレンのいる部屋に入ってきた。

「あれ？居ねえぞ？」男達は銃を構えたまま、部屋を見渡す。そこにはカレンの姿は無く、ただ書類の山があるだけだった。

「気のせいかな？」

「いや。確かに声が聞こえたが」男達は顔を合わせる。男達は書類の山をかきわけはじめた。しかしカレンの姿は見当たらない。

「外に逃げたのか？」

「ここまで探していないんだ。そうかな。」男達は銃を下ろし、部屋から出ていった。

「あ・・・危なかったあ」カレンは通気孔のタクトを開け、なかに隠れていた。カレンは息を殺しながら通気孔から出た。

「あーあ埃だらけ。帰ったら洗わなきゃなあ」カレンは服の埃を払

った。そして廊下を確認し、刀の入った鞘を押さえながら部屋を出た。

（なんかきりないなあ）カレンは足を止めた。そして、スーツの男が1人だけ歩いて来る姿を確認すると、その男の前に飛び出した。

「し．．．侵入しや．．．」男が驚いた一瞬でカレンは刀の鞘で男を殴り、失神させた。

「今のうちに．．．」カレンは男を先程の書類の部屋に引きずっていった。

＊

その頃病院では遼が目を覚ました。

「おお．．．俺死んでなかったんだ。」遼は呟いた。近くにいた看護婦が遼が起きたことに気がつく、慌てて病室から出ていった。

「カレン．．．俺の手紙．．．読んでくれたかねえ．．．」遼は病室に入ってきたカレンの対応をした医師ではなく、40台後半ぐらいの医師に聞こえるように言った。

「ああ、あれ渡したら何処かに飛ぶように出てったって河寺が言ってたぜ。」医師は笑顔で言う。

「そーか飛んでったか。」遼はクスリと笑った。そして医者に手に向け、こっちにこいといわんばかりの動作をした。遼は体をゆっくり起こして、医者 of 耳に口を近づけた。

「なあ山野さん・・・」遼は医者にある事を願った。医者は驚いたが遼の目を見て、頷いた。

「カレン・・・」遼は窓を見て何かを呟いた。

その頃空母内では、カレンがある作戦を実行中だった。

カレンは先程倒した男の服を奪い、着ていた。少しサイズが大きめのスーツだがカレンはかわまず、その恰好のまま、部屋を出た。途中ですれ違うスーツの男やドレス姿の女の反応が無いことに安心し、カレンはすれ違った5人目の女に道を問いた。

「ボスの部屋？この先を真っすぐ進んで3つ目の角を左に曲がって真っすぐいったらあるわ。何か用なの？」

「侵入者の情報がつかめたのでな」カレンはそう言ってその場を後

にした。その後ろ姿をドレス姿の女が不気味な笑みを浮かべてみていた。

カレンは言われたとおりに進むと、他とは違う材質の扉。木製だ。カレンはその扉をくぐった。

「侵入者の情報がつかめました」カレンは頭を下げ、頭にある作戦の通りに話を進めた。顔をあげると、部屋の状況がつかめた。

部屋には沢山のスーツ姿の男とドレス姿の女が銃を構え、立っていた。そしてその真中に真っ赤なドレスを着た女性が立っている。

「ようこそ。小さな反逆者さん」女性は無表情で話しかけた。カレンはその女性に刀を抜き、剣先を向けた。

「だれだ。お前は、私はボスに話がある」カレンは周りを気にしながら言った。

「残念だけど、私がボスよ」

「なっ・・・なんで!?!? このボスは私のママのはず・・・」カレンは動揺し、剣をおろした。

「へえ・・・あなたのお母さんだったの。残念ね。もういないよ」

「う・・・嘘だ！」カレンは再び剣を向けた。女性は全く動揺していない。

「私はフラソⅡフラメルカ。国際的マフィア『ヒガンバナ』の第2代目のボス。」

「ひがんばな？ 日本語なのね？」 カレンは問う。

「花言葉に意味があるの」フラソは右手をゆっくりあげた。

「もう時間がないわね。死んじゃってくれる？」フラソが言い終わったと同時に、近くにいたマフィア全員の手持たれた銃やライフルが火を吹いた。カレンは急いで扉から外に出た。部屋からま正面の壁銃弾が当たる。

カレンの進む先には大勢のマフィア。カレンは隣にあった部屋に飛び込む。

「残念。そっちは行き止まり」フラソは足音を立てながら部屋に入ってきた。後ろには数えきれないほどのマフィアが銃を構えている。

「あ、それと後ろの袋。麻薬が入ってるから傷つけないでね」フラソが指差した先、カレンの後ろに小麦粉の袋が積んである。

「これが麻薬？ あんたら珍しい麻薬使うのね？ これで麻薬クツキーでも作るつもり？」カレンは袋をちらりと見た後、自分のポケットを見て笑った。フラソにはそう見えた。

「麻薬と小麦粉。混ぜてあるのよ。カモフラのつもりでね」

「じゃあ、私を撃ったら大変ね」カレンは袋に身体を接着させ、微笑を浮かべた。

「あーなるほどねー」フラソは納得のしぐさをとった。

「粉じん爆発ね。それだけの小麦粉があったら……。私たちも死んじゃうわね」フラソは無表情で拳銃を取り出す。

「でもね、私はこの位置から確実に貴方の胸を貫くことができるのよ。私が銃をとり、引き金を引くまで約1.2334秒。あなたが私が銃をとったと確認した瞬間。あなたはサヨナラというわけ」フラソは銃を指で回転させた。

「どこかの殺し屋みたいね」カレンは銃を抜いた。

「あながち間違っていないね。私は昔悪党専門の殺し屋だったからね。あのヒーローのヒロインとして」

「あのヒーロー？」カレンは銃を構えたまま問いた。

「しゃべりすぎた様ね。もうすぐ向こうに着いちゃうし、さっさと死んでもらうね」フラソは指で回転させていた銃を止め、片手で構えた。

「どうやらそうみたいね。あいつも来たみたいだし」カレンは構えていた銃の銃口を袋に変えた。周りのマフィアがどよめくがフラソは一切あわてず、銃をおろした

カレンは後ろを振り返ると、引き金を引いた。

およそ100kgの小麦粉と1kgの麻薬は大きな爆音と共に大きな火柱を上げた。船内は火に包まれる。

爆発の中で、フラソは何事もなかったのように立っている。

「あー逃げられちゃったみたいねえ。でも逃げられないよ」フラソの見つめる先には、刃物で切られたような壁に大きな穴があいていた。

炎が踊る船内を、腕を抑えたままカレンは走っていた。右腕からは血が流れ、その血が床に点々と垂れている。

後ろからはマフィアたちが銃を撃ちながら追いかけてくる。カレンは何度も打たれながらも、階段を上がり、甲板へ出た。

「貴方バカなのねえ、甲板になんか逃げたらもう後は無いわよ？ま、どこに逃げても結果は同じだけどね」フラソは燃える船内から出てきた。後ろからマフィアも続々と出てくる。フラソは後ろのマフィアたちに脱出用の飛行機を用意しろと命令した。マフィアたちはカレンがいる方とは逆の後ろ甲板に走って行った。前の甲板ではカレンとフラソの二人が取り残された。

「船がやられちゃ、私ももう終わりね。さっさと飛行機で逃げたいものだから早く始末されちゃってよ」フラソはカレンに発砲した。カレンは刀で銃弾を二つに切り、甲板を走って逃げる。

「なら早く逃げなさいよー!!」カレンは発砲するが、一発も当たらない。

「へったくそね。銃の扱いは!」フラソが笑いながら追う。発砲する銃弾は当たりはしないものの、カレンの胸の高さを通っていく。カレンは発砲音がするたびに冷や汗を流しながら逃げる。

カレンは逃走の末、マフィアたちがいる後ろ甲板に着いた。マフィアたちはカレンに気付き、銃を構えカレンに接近してくる。

その時、カレンの携帯が鳴った。カレンは笑みを浮かべ、足を止めた。フラソも走ることをやめ、ゆっくり歩きながらカレンに近づいてくる。

「あきらめた? 前には私、後ろには沢山の敵。逃げ場は無いわよね」フラソは銃を構えた。

「死ね」フラソが銃を撃った途端に、カレンは船から飛び降りた。

「なっ! 今は太平洋のど真ん中よ?」フラソは船から海を見下ろした。

下から1機の小型飛行機が浮上してきた。中には40代ぐらいの医者とか、カレンが座っている。カレンはフラソに向かって手を振った。

「逃がすな！ 殺せ！」 フラソは発砲しながら大声で言った。マフィアたちはあわてて小型飛行機を発砲するが飛行機はすでに空彼方へと消えた。

「ちっ！ 商売道具を失ったと同時に侵入者も逃がして、船も炎上だなんて最悪！」 フラソは銃を甲板に叩きつけた。

「もういいわ。早く逃げるわよ！」 フラソはマフィアたちに命令した。マフィアたちは脱出用の飛行機に乗り込んだ。フラソは空を憎らしそうににらみ、飛行機に乗った。

フラソ達を乗せた飛行機が飛び立った数分後に船は爆発し、海に消えた。

フラソたちの乗っている飛行機の中で、一人の男が携帯でメールを送っていた。

そのメールは、カレンの携帯へ届いた。カレンは携帯を開きメールを確認した。

「お前のお取り作戦のおかげで侵入成功。
後で来い」 送り主は遼と書かれていた。

タイミング教えるから

5時間目 侵入&作戦

遼の作戦が始まったのは廃工場からである。遼は廃工場で意識を失う前、マフィア達が交わした電話の内容を聞いたのだ。

「明日の龍。黄金の国から母なる空は放たれる」

遼はこの会話を理解した後、マフィア達の攻撃で意識を失った。

病室で目覚めた遼はカレンに電子メールを送った。内容は「後でいく」の4文字。遼はメールで書いた通り、医者に「カレンを迎えに行く。だから飛行機だしてくれ」と言い、医者と共にカレンを迎えに行くため、飛行機を飛ばした。

だが彼の作戦はおもわぬ所で狂ってしまう。

彼は空母に着いた時、カレンに「着いた」とメールをしたがカレンはメールに気がつかなかったのだ。

遼はそのため、自分も空母に降りるという作戦に変える。遼はカレンが侵入し、混乱している空母に乗り込み、偶然近くにいたマフィアから服を奪い、マフィア達に紛れた。

遼が船の中でカレンに会ったのは粉塵爆発の時である。遼は粉塵爆発の時、フラソの後ろから自分の顔を覗かせた。カレンはそこでようやく遼に気がつき、爆発を起こした後、甲板に逃げた。

遼はカレンが甲板に出た時、フラソの後ろから遼はあるジェスチャーをした。

遼はひたすら「下を見る」という仕草をした。カレンは言われた通り、下を見ると一台の飛行機が遠くの海の上に止まっていた。遼は携帯で医者に合図を送り、医者に飛行機を出させた。

カレンはフラソから逃げながら飛行機が飛ぶまで待ち、飛行機が飛んだと同時に飛び降りた。カレンは上手く飛行機に乗り、遼はマフィア達に紛れ込むことに成功した。

即席の作戦とはいえ、全てがうまくいった遼はマフィア達が乗る飛

行機で微かにほくそ笑んでいた。隣に座っていた男に何かを言われたが遼は聞いていなかった。

そんな遼を乗せた飛行機の40km後ろをカレンを乗せた飛行機が飛んでいる。中ではカレンと医者が会話を交わしていた。

「つまりおじさんは遼のお父さんの友人で今回の作戦は遼に半ば強制で参加させられたって事ね」

「強制っつーかサービスだ。遼君の親父には俺も世話になったんだな」

「と、いうか遼って怪我大丈夫なの？」カレンは飛行機の運転席のドリンクホルダーのコーヒーに手を伸ばした。医者は「それおじさんのコーヒー」とカレンに聞こえるようにつぶやく。カレンは顔をしかめながら手を引く。

「ま、やれるだけのことはやった。あとは無理な動きをしなければ大丈夫だ」

「無理な動き・・・ねえ・・・」カレンは窓の外を覗いて言う。下に広がる広大な母なる海は静かに輝いていた。

一方マフィアと共に飛行機に乗っている遼はマフィア達に囲まれていた。

しかし見つかったわけでも正体を見破られたわけでも無い
遼は青色の袋、つまりエチケット袋に吐いていた。飛行機酔いしたのだ。遼の座っている座席に置いてある携帯の画面に送信の文字が光る。

遙か彼方の空で飛行機に乗っているカレンの携帯になる。

「酔った時にはどうしたらいい」カレンはメールを確認するとすぐに隣の医者に問う。

「酔ったらどうしたらいいだって」カレンは携帯のメールタイトルに「あ、そう」と打ち込んだ。

「吐け」医者は即答する。

カレンは医者に言われた通りにメールの本文を書き、送信した。しばらくたって返事はなかった。

「い……！　おい！　ついたぞ！　新入り！」遼は何者かに体を揺さぶられて目覚めた。遼はあまりにも酔ってしまったので一旦眠ることにしたのだ。そして今、起された。

遼が飛行機から降りると、自分の目の前に広がっていた風景に目を疑った。

遼の目には空港ほどの大きさの建物が建っていた。しかし外観はカラフルにペイントされ、マフィアの基地と言われても誰も信じないだろう、そんな建物だった。

「こ……これが基地……ですよね……？」遼は念のため隣にいた若い男に問う。若い男は苦笑いしながら遼に顔を洗ってくるように言った。おそらく寝ぼけていると思われるのだろう。

遼は顔を洗うために基地に入った。基地の中は外見に似合わず、鉄板作りの壁と床でその姿をなしていた。歩くたびにカッソ、カッソと音が出る。音は遠くまで響く。

「……洗面所どこ？」遼はまた聞いた。さっきの若い男がため息をつく。

「あーもう！新人だからわかんないんだな！？」そうだよな？　優しく案内してやるよ！この霧山きりやまが！　しっかり通路覚えとけ」霧山は遼の手を引っ張り、廊下を進んでいった。

洗面所で遼は顔に巻いてある包帯を外して顔を洗った。実際寝ぼけてもいないが、寝ぼけているということになっているので一応洗った。洗面台は清潔でゴミ一つない。

「綺麗っすね。洗面所」　遼は顔をタオルで拭きながら言った。

「まあな。これも全部先代の方針でやってんだ」霧山は壁にもたれながら言った。

「先代？　と、言う事は今とは違うんスカ？」遼は包帯を巻きなおす。

「ああ、先代はどっかいっちゃったらしい。今のボスが言ってた」

「今のボス？」遼が小首をかしげると、霧山はひどく驚いた表情と声を出した。

「おまえ・・・今のボスの名前も忘れちゃったのか？　頭大丈夫か？」霧山はため息をついた。

「今のボスはフラソⅡフラメルカさんだよ。　なんか昔は誰かとタッグ組んでて悪と戦ってたとか。　そんな人がなんでマフィアなんていう組織のボスなんかやってんだろぅなぁ」霧山は突然あることを思い出したような表情を見せた。

「そうそう！　タッグ組んでた相手の名前は確か・・・た」霧山が話している途中で基地にベルが響いた。霧山は時計を見てあわてた。

「やっべ！　もうこんな時間じゃねーか！　おい新入りついてこい！」　霧山は遼の手をまた強引に引っ張る。遼は抵抗せず、人形のように引っ張られていった。

＊

霧山が足を止めたところは大きな部屋。　コンサート会場程の大きさはある。　一番前にはステージがあり、まさにコンサート会場のようだ、と遼は心の中でうつつら思った。　部屋の中にはスーツの男や黒いドレスの女が整列している。

霧山は遼を引っ張ったままあいてるスペースに立った。　遼は隣にいた男性にぶつかり、睨まれる。謝罪をしたが舌打ちをされ、遼は不機嫌になった。

5分ほどすると、先ほどカレンと戦いを繰り広げたボス。つまりフラソが不機嫌そうな顔で出てきた。

「はい！　じゃあ今日の状況報告しなさい！」フラソが椅子に座ると列の先頭にいた者たちがフラソに書類を提出した。　フラソはざ

っと目を通し、何かを言う。出てきた者たちは首を縦に振り、元の位置へと戻る。その動作が合計10回続き、状況報告という名の集会は幕を閉じた。

集会が終わり、遼が霧山の元へ行こうとしたときに、フラソはステージの上から遼を睨んだ。遼は自分を睨むフラソに頭を下げ挨拶をした。何故睨まれているかはわからなかった。

「おお新入り」霧山は自分に近づいてくる遼を見ていった。

「あーなんか新入りって呼び方違和感あるな。お前名前は？」

「たて・・・中川遼です」遼は偽名を使った。もし自分がマフィアに狙われているなら、実名を出すとどうなるかわからないからだ。

「ほー、りょうねー。なんか俺が昼間殺した楯河遼とおんなじなんだな。俺はあんとき顔がばれないようにマスクしてたからあいつの顔は知らねえけどな」遼はその言葉にびくりとする。

（こいつ・・・昼の・・・）遼は冷や汗を流した。遼の異変に霧山は気付く。

「大丈夫か？ 顔色わるいぞ。っていつでもお前の顔に包帯巻いてあるからはつきりわかんないけどな」

「あはは・・・ちよつと腹痛が」遼は震える声で言った。霧山は「なら大丈夫か」と笑う。霧山はある程度笑うと、急に表情を変え、自分のポケットを探りだした。

「わりいなちよつとメールが入った」霧山は遼に背を向けた。遼はメールを見ている霧山の口元が不気味に緩んだように見えた。

「悪いな。嫁からだ」霧山は笑った。遼は先ほどの笑みを嫁からのメールの喜びだと理解し、「よかったですね」と笑顔で言った。

（こんなかでもメールは可能か・・・）遼は携帯を触る。

「あとの予定は・・・飯食って、風呂入って寝るだけだな」霧山は何も見ずに言った

「え・・・ふ・・・風呂!？」遼は思わず言ってしまった。

（やばい・・・顔がばれたら・・・）遼は顔をさすった。顔にはにきびが出来ている。

「あー俺は今日おなか痛いんで風呂は遠慮しときますわ」遼は腹をさすりながら苦笑いした。

「あ、そう」霧山はそれだけ言って、遼の手を引っ張った。

「飯食いに行くぜ」霧山は笑顔で言った。

夕食を終え、風呂は入らずにやり過ごし、遼は部屋のベッドの上にいた。手には携帯電話が握られている

（カレンにメールするか。大体の基地の配置は覚えたからな。いずれ乗り込むときに必要だ）遼は夕食時に霧山から聞いた基地の配置と基地の1日の流れをメールの内容に打ちこみ、送信した。しかし返事はなかった。

朝になり、遼が起き上がると部屋には誰もいなかった。もぬけの殻である。

「霧山さーん」遼は誰もいない部屋で少し大きな声で叫んだ。霧山どころか誰も出てこない。着替えて廊下に出たが、廊下も同じだった。

遼は昨日、集会があった部屋に行った。ステージに誰かが立っている。

「あ・・えーと霧山っていう人知りませんか？ と、言うか他の人ってどこ行きました？」遼はステージ上の誰かに聞いた。

「それより私も聞きたいことがあるんだよね」ステージの上にいたのは女性だった。ステージに光がともる。

女性はフラソだった。

「ねえ楯河徹君」フラソは遼を指差した。遼の後ろにいつの間にかマフィアが大勢集まっている。

「あらら。バレちゃった？」遼は苦笑いする。

「ええ。最初からわかってたけど、花蓮ちゃん呼び出すために黙っ

てたのよ」

「あらら？ 残ねくん呼んでないんだよね」遼は笑った。

「あらら？ 残ねくん。あなたが昨日送ったメール。あれはこの基地にある妨害電波室で妨害されてエ、私がちよつと変えちゃった」

「は？ おいどーいうことだ！」遼は叫ぶ。

「敵に捕まった。助けてくだちゃいって送ったのよ」フラソは笑った。

「オイ 助けてくだちゃいってなんだ！ ブチ殺されてえのか」遼は銃を向けた。後ろにいたマフィアたちも遼に銃を向ける。

「あらら。後ろも前も逃げ場ないじゃん。ピンチってやつだな俺。でも知ってるか？ ヒーローっていうか俺みたいな主人公は死なないんだぜ？」遼は笑う。

「どーかしらねえ」フラソも笑う。遼とフラソがお互い笑ったまま時間だけが過ぎて行く。

「って時間稼いでも無駄かな？ やるしかねえか」遼は地面を蹴ってフラソに向かって走り出したと同時に基地に何かが突っ込んだ。遼のその何かに吹っ飛ばれて地面にたたきつけられた。

飛んできたのは飛行機だった。飛行機には2人の人間が乗っているように見える。

飛行機から誰かが出てきた。医者のような服を着た少女。カレンだった。

「ヒロイン参上！ 遼？ 大丈夫」カレンは白衣を舞わせ、剣を構えた。「さっきまで大丈夫だったけど今飛行機にはねられたせいで大丈夫じゃない」遼が地面にうつぶせに倒れたまま言った。

「よし！ 大丈夫！」カレンは力強く言った。

「引っかかってくれてよかったわ。あの時のかりと、あんたのお母さんの復讐をするためにイ！ 死んじゃってくださいます？」フラソが笑顔になった。

「知ってる？ ヒロインって死なないのよ？ 主人公とおんなじ」カレンが笑顔になる。

「どーかしらねえ。ってさっきもおんなじこと聞いた気がする」フ
ラソも笑顔で銃を構えた。

6限目 d e a d & l i v e

「まったく・・・無茶しやがるヒロインだ」遼は体の上に乗っかって
いる瓦礫をどけ、立ち上がった。

手で服に付いた埃を掃っていると、地面に血が一滴垂れた。遼は自
分の口が切れてる事に気がつき、血を親指の左手で拭いた。

「お陰で死ぬかと思った」遼は視線を睨み合う二人に向けた。

「ヒーローは死なない、じゃなかったの？」フラソが嘲笑する様に
言う、遼はその言葉に対し笑った。

「ヒロインの攻撃は対象外なんだよ」

「なら私の攻撃でも死ぬのね」フラソが不気味に微笑んだ。遼には
その笑みが理解できなかった。

「私はね、ちょっと前まで第0菊桜高校・・・つまり今の正称高校
の生徒で、ある人のヒロインをやって居たの」フラソは銃を下ろし
た。フラソは攻撃体勢を止めたがカレンは止めない。

「だから何？」カレンは未だに警戒し、フラソに刀を向けている。

「興味深いね」カレンの後ろから遼が現れた。遼はフラソに向けられているカレンの刀を手で抑え、刀を下ろさせた。カレンは不信そうな顔で遼を見つめたが、遼はカレンの眼を見て、信じろといわんばかりに頷いた。カレンも遼を信じ、刀を下げた。遼は話を続ける

「今の話、実に興味深いな。もっと聞かせてくれよ。一体誰のヒロインだったんだ？」遼の質問に対し、フラソは黙った。その姿は話す事をまとめているようにも、話す事をためらっているようにも見えた。どちらにしろ、快く話してくれるようには見えなかった。

「……」フラソはぼそぼそと何かを呟いた。遼はその言葉が聞き取れず、聞き返した。フラソは今度は聞こえる声で言った。そして二人はその名前を聞き、驚愕した。

挙げられた名前は遼の父にして、伝説の英雄の楯河卓だった。フラソは自分が伝説の英雄の楯河卓のヒロインだったことと、自分が楯河卓を慕い、愛していたことなどを所々ぼかしながら話した。

「信じれないな」遼が首を横に振った。

「信じなければそれでもいいわ。紛れも無い事実って事は確かだから……」フラソは話を続ける。

「しかもその話はあなたの父である卓の死について関係し、今に続くわ」

その言葉に遼は驚きの意味で声を漏らした。

「俺の親父の死になにか真実があるのか？」遼の態度に対し、フラソは首を横に振った。

「喋りすぎたようね」遼はフラソが話を止めた事に対し、思わず感情になる。

「おい！話せ！親父の死にどんな真実があるんだ！滅亡させたマフィア達の復讐じゃなかったのか！？」遼の質問にフラソは答えない。口を閉じ、黙っている。

「吐かねーなら吐かせるまでだ。俺は真実を知りたい！」遼は拳を握った。今の遼は丸腰であり、拳で戦うしかないからだ。

「いくらなんでも不利じゃない？弱者をいたぶる趣味はないんだけど。なんなら鉄砲つかわないであげようか？」フラソは余裕の表情を見せる。カレンはその態度に腹が立ち、舌打ちをした。両者にのみあいが続いた。

先に動いたのは遼だった。遼がふるった素早い右ストレートにフラソはひらりと身体を宙に舞わせ、乗っかると遼の後ろを取った。カレンは刀をフラソに振るが、フラソは遼の襟元を素早くつかみ、カレンにぶつけた。

「いってゝかなりの力だなあの女！　ゴリラみてえ」遼はせき込みながら立ち上がった。フラソはまるで赤子の相手を指定するような笑みを見せ、立っている。その態度に対し遼は「余裕だな」と笑った。

倒れていたカレンが背中を曲げ、好転するように手を後ろでつくと思いつき手のひらで床を押した。カレンはその反動で起き上がった。そして床を強く蹴り、フラソまで走り抜けた。カレンはそのままの勢いで刀を振るうが、刀は一太刀もフラソに当たらない。

「先輩からの助言、強い相手には目で見ず心の目で見ること大切」フラソはそう言ってカレンの振るった刀を人差し指で止めた。カレンは手に力を入れるが、刀は動かない。

「しかも心が乱れてる。そんなんじゃ戦場で生き残れないわよ」フラソがカレンの腹部にけりを入れた。鈍い音と共にカレンの口から真っ赤な液体が吐きだされた。カレンはよろめき、刀を握る手を開いた。

フラソは刀を奪い取り、刀の側面で後ろから殴りかかる遼の振るう

拳を受け止めた。

そして不気味に笑った。

「バラバラのコンビ、あんたら相性会ってないからコンビ解消した方がいいわよ」フラソは刀を振るった。鮮血と共にカレンの叫び声が響いた。

真っ赤な血と共に遼の身体がゆっくりと床に倒れた。

7 限目 生&死

「伝説の英雄の息子だからって別に強いわけじゃないのね」フラソは血を流しながら床に倒れている遼を見下すように言った。遼は目が半開きになり、顔からは生気が消えている。

「一人始末したから、残りは花蓮。あなた一人ね。それとあの医者も殺す。 楽ね」 フラソは血の滴る刀を花蓮に向けた。

「矢倉さん。遼は任せました。死なせたら卓さんに殺されると思ってください」花蓮は拳を構えた。矢倉は白い箱を持ち、遼の元に駆け寄ろうとした。

だがその足はフラソが放った銃弾によって止められた。

「余計な事はしちゃ駄目よ。矢倉ちゃん、あなた昔そうやって卓に怪我させたの覚えてないの？」フラソは笑った。矢倉はフラソの言葉に対し、鼻で笑った。

「よく言うぜ。俺が助けなきゃ死んでたくせに」

「でもあれのせいで卓は片腕失ったのよ？」フラソは自分の左肩を手の平で触った。矢倉は下を向き、下唇を噛んだ。

「まあいいわ。助けたきゃ助けなさい。私は手加減しないわよ」フラソは花蓮を睨みつけた。

「なに？来ないの？」花蓮は笑った。だが自分でもわかるぐらいに作り笑いである。だがフラソは動かない。

「なら」花蓮が足を動かした。「こちらから」花蓮は地面を強く蹴った。

だが花蓮が進んだのは前ではなく後ろだった。花蓮はフラソに背を向け、走る。

「鬼ごっこ？まあ思惑はわかってるけど付き合ってあげるか」フラソは刀を持ったまま花蓮を追った。

先程の位置から40mほど進み、花蓮は足を止めた。そしてまた地面を蹴った。

次に花蓮が向かったのは天井だった。花蓮は大きく飛び上がり、天井の骨になっている鉄骨に掴まった。

「どの道素手じゃ勝ち目はないよね」花蓮は天井にぶら下がる電灯を掴んだ。電灯は下が傘の様に開いていて、そこから天井まで棒が伸びている。花蓮はその電灯の棒の部分を片手で掴んだ。

「やああっ！」花蓮の声と共に電灯は天井から外れた。花蓮は取れた電灯を傘と鉄棒に分けると、天井から手を離した。

「ふーん」フラソは落ちてくる花蓮を見つめ、刀を構えた。落ちてきた花蓮を斬るつもりなのだ。

花蓮が地面に近づくとフラソは刀を振った。刀の腹が花蓮に迫るが、花蓮は手に持っている鉄の傘で刀を防いだ。

花蓮はそのままの姿勢でフラソを鉄棒で突いた。フラソは吐血し、後退した。

「これでまともに戦える」花蓮は棒を回した。フラソは口から垂れる血を指で拭い、笑った。

笑った瞬間、両者は互いに詰め寄った。

二人はまったく譲らなかった。攻めの攻防が続き、二人は次第に最初の場所まで戻っていた。

そしてこの勝負に決着が着く時がきた。

フラソが振るった刀を後ろに後退し、かわした花蓮は先程斬られた

遼の血を踏み、後ろに転んだ。フラソは少し口元を緩め、刀を振り下ろした。

その頃医者である矢倉は遼を安全な場所に移動させた後、遼の治療をしていた。

傷の具合からこれは駄目かもしれないと矢倉は思いながら治療を続けていた。

＊

その40 m先では二人の勝負に決着がついていた。

フラソが振り下ろした刀はカレンが鉄棒を使ったとっさのガードにより、真っ二つに折れた。フラソは眼を開いて驚いた。

「わたしの勝ちね！」花蓮はあわてふためくフラソの腹を鉄棒で突いた。フラソは口から赤黒い血を吐き、後ろに倒れた。

「ゲームセットよ」花蓮は微笑を浮かべた。

だが圧倒的な不利な状況に陥っているはずのフラソも同じように笑っていた。

「残念ね」フラソはいった。

「なにが？」花蓮は答えてから気付いた。

部屋の出口や窓からスーツを着た男達が部屋に侵入し、花蓮や矢倉達を囲んだ。花蓮は舌打ちをし、ゆっくりと立ち上がるフラソを睨みつけた。

「残念。タイムアップよ」フラソは一人の男を呼び、拳銃を渡すよう指示した。その間に花蓮は鉄棒で殴りかかるが、隣から現れた男に棒を捕まれ、地面に投げつけられた。

「今度こそ諦めなさい。ここまでオツカレ。ゆっくり休みなさい」フラソは男から手渡された拳銃の銃口を花蓮に向けた。

「確かにタイムアップ。タイムオーバーはゲームで言う負けよね。だけどそんな状況を脱出する方法があるのよ」

花蓮の発言に対し、フラソは反応しなかった。また反応すればなにか罠があるかもしれないと思ったからだ。

「無視できるのも今のうち」花蓮は白衣に手をかけ、白衣を脱いだ。

「こんなことしたくないんだけどね」花蓮の服の中にあったのは爆弾である。腹の回りに巻かれた爆弾はいずれも丸い筒状の形をしている。

「自爆する気？ダサいわね」フラソが罵った後に花蓮は導火線に火をつけた。

「あんたに殺されることが一番ダサい」花蓮はそう呟いた後、口元を緩めた。

火は導火線を伝わり、爆弾に届いた。

8限目 母&子

「では！ごきげんよう！」花蓮が叫び、両手を挙げると、爆弾は爆発した。

しかし爆発は白煙が発生しただけであった。部屋は白煙で真っ白になり、マフィア達はあわてふためき、騒いでいる。

「慌てるな！すぐに部屋の窓を開けろ！」フラソが叫ぶ。

窓が開き、煙が消えると、そこに花蓮達の姿はなかった。

「逃げられた？」フラソは窓をみた。そして、口元を緩めた。

「やつらはまだ館内にいる！おそらく倉庫のヘリコプターを狙いにいった！」

「追い詰めて殺せ！殺したやつは位を上げてやろう！」

その言葉に数百人のマフィア達は一斉に動きはじめた。

＊

「どうやらばれたみたいね」慌ただしく動く館内に、花蓮が舌打ちした。

「なら早く脱出・・・」医者が背中におぶっている遼を持ち直して花蓮にいった。

「いや、多分今は全ての車庫に敵がいる。ここは・・・」花蓮が話している最中であつた。

銃声が響き、花蓮の右肩に鮮血が流れ出した。

「ばれた！逃げるぞ！」花蓮が医者に呼びかけ、走り出した。

だが、もう回りは敵に囲まれていた。

「鬼ごっこは終わりみたいね」フラソがマフィアを掻き分けて、花蓮の前に立った。

「私もあまり暇じゃないの。早く死んでもらえる？」フラソが銃を

花蓮の頭に押し付けた。

（しまった・・・ガードを・・・）花蓮は手を動かした。右手には銃が握られている。

ーパーン

銃声が響き、花蓮から血が流れ出た。

「な・・・遼・・・何を・・・」花蓮は膝をついた。ドサリと言う音を立てて倒れる。その後ろでは遼が銃を片手に鋭い目つきで自分の前を睨んでいた。

「すまねえ。けど・・・」

「こうでもしなきゃな、フラソを倒せなかった」

そう言って遼は銃を下ろし、倒れている人物に近づいた。

倒れているのはフラソである。

「貴様・・・仲間ごと撃つなんて・・・。最悪だ・・・。」フラソが血を吐いた。

「カレンには悪いって思っている」遼は軽く眼を閉じた。

「き・・・貴様・・・それでもヒーローか・・・」

「あんたに言われたらおしまいだ」遼は切られた傷を押さえた。いきなり動いたせいで血がにじんでいる。

「かつて親父と共に戦ったヒロインの桐島桜さんよ」

遼の発言にフラソは眼を大きく開いた。

「なんで・・・知ってる・・・」フラソは腹を押さえながら上体を起こした。

「この写真だよ」遼はポケットから一枚の写真を取り出した。

写真に写っていたのは笑顔を浮かべる二人の男女。

今は亡き遼の父、卓と、桜という名のフラソが写っていた。

「この写真が取られたのは16年前。つまり俺が生まれた年だ。だけれどあんたは腹が大きくない」

「そしてこれが、もう一枚の写真。写ってるのは父さん。そして、俺の母さんだ」

遼の写真を見て、花蓮は眼を見開いた。

「お母さん……？」

「そう。花蓮のお母さん……。え？」

花蓮の言葉に遼は思わず声を出した。

「それ、私のお母さん……」

「それ私のお母さんの写真なんだけど……」花蓮は遼の手にある数枚のうちの一枚を指差して、声を震わせた。

「冗談よせよ。今、そんな事を言ってるシーンじゃないぜ」遼は苦

笑いしながら否定した。額から汗が一筋流れる。

「冗談なんかじゃないわよ！それは私のお母さん！」花蓮は声を上げた。

予測しない事態に遼は鼻で笑った。そのあと首を横に数回振り、フラソに視線を変えた。フラソはすっかり衰弱している。

「まあ、その話は帰ってからにしよう。とにかく今はフラソをどうするかだ」遼は苦笑いしながらそう言った。花蓮は困惑しつつも首を縦に振った。

「どうするっていつでも、連れて帰るわけにも行かないよね。かといって置いていくわけにもいかない・・・」花蓮は足を引きずりながら遼に近づいた。

その時であった。

発砲音が響いた。銃を持っているのは花蓮。

銃弾をくらったのはフラソであった。フラソは最後の気力を振り絞り、遼を銃殺しようとしたのだ。

フラソは動かなくなっている。死んでしまったのであろうと、3人は思った。3人を囲むマフィア達は茫然と立ちすくしている。

「帰るぞ」 遼が花蓮と医者に呟いた。

3人はそのまま車庫に消えた。

＊

帰りのヘリで花蓮は窓から見える景色を見ながらため息をついた。遼は花蓮が気になったが、操縦中なので相手は出来ない。

「なんかなあ・・・」 花蓮がつぶやいた。

「なんかあっけないよなあ・・・」 花蓮がもう一度ため息をついたときだった。

花蓮が何かを見つけ、目を大きく開いた。額から汗が垂れる。

「遼！急旋回！」花蓮の声が響いた。遼は戸惑いながらも機体を旋回させた。

機体の横をミサイルが通り過ぎて行く。

花蓮がヘリの扉を開き、下を見るとそこにいたのは死んだはずのフラソが船に大勢のマフィアを連れてこちらを睨んでいた。

「死んだと思った！？そんなあっけないわけないでしょ！」フラソがマイクを通して大声を出した。どこからその気力はでるんだ怪物め、と遼は呟く。

「医者……。ちょっと操縦頼む」遼は医者に操縦が変わった。そして花蓮と同じようにドアから身体を出した。

「バカな親父の責任。子供がとるしかない……。」遼は呟いた。そして花蓮を機内に突き飛ばした。

「何があっても来るな。必ず帰る」遼はそう呟いて扉を閉めた。機内で花蓮が叫んだが、遼の耳には入らない。

遼はそのままヘリから飛び降りた。花蓮は焦りながらヘリのドアを開けようとするが、開かない。

「遼——————っ!!」花蓮の叫びを乗せて、ヘリは船から離れて行く。

「ちょっと!止めて!船に私もいかせて!」花蓮は操縦する医者に怒鳴った。しかし医者は答えない。

「遼一人で倒せるわけじゃないじゃん!あんな数!死んじゃうよ!」花蓮はさらに大声で怒鳴る。

また医者は答えない。

「もういい!代わって!」花蓮は医者に掴みかかった。しかし花蓮の手は医者に弾かれ、花蓮はよろめいた。

ようやく医者は振り返り、花蓮をにらんだ。

「あいつの心意気は無駄にするな!あいつはお前に死んでほしくな

いから一人で降りてった！しかもあいつは帰ってくるって言った！
信じろ！奴を！」

医者という言葉に花蓮は黙った。

しばらく沈黙が続き、医者が正面を向くと、医者の耳に嗚咽が届く。

医者は黙ったまま操縦を続けた。

2人を乗せたヘリは、もう船では確認できなくなっていた。

9 限目 終&始

あの日から2日が過ぎた。

2日たってなお、遼は花蓮のもとには帰ってこない。それどころか、フラソ達がいっただうなったのかさえ分かっていない。

花蓮は病院のベッドの上で携帯を意味もなくいじっている。医者は特に怪我也なかったので、現場に復帰した。

花蓮は携帯を閉じて窓を開けた。病室にそよ風が流れ込み、カーテンがゆらゆら揺れる。

花蓮は何も言わずに、窓から飛び降りた。そしてその下の建物の屋上に着地し、街を見下ろした。服が風でなびく。

花蓮は何もしゃべらず、建物の屋上と屋上をわたっていく。時折、建物の住民が目丸くしながら花蓮を見ているが、花蓮は気にはしない。

30個ほど渡った花蓮は見なれた学校にたどり着いた。自分の通っている学校である。

校門の前に立った花蓮はある人物から声をかけられた。

「花蓮・・・どうしてここにいるんだ。お前は病院にいるはずじゃなかったのか？」

「お父さん・・・。いや・・・校長先生と呼んだ方がいい？」

「どちらでよいが、私の質問には答えろ。何故ここにいる」

「遼が帰ってきていないか調べたかった・・・それだけ」

「遼君・・・か・・・」

校長はそれっきり黙りこんだ。何かを考えている、と花蓮は受け止めた。

「情報がないことはない」

校長は小さく言った。花蓮はすぐにその言葉に飛びついた。

「教えて！ 遼はどうなったの！ 生きてるの！？」

「まず生きている……。だがそれはあることから分かることだ……。とても危険だ」

花蓮は校長に掴みかかった。校長は驚き、目を白黒させる。

「教えろ！ 遼の居場所！ 私がいますぐ助けに行くから！」

しかし花蓮の質問に対し、校長は言葉を濁す。花蓮はため息をついて掴む力を緩めた。

「お願いします。教えてください」花蓮は頭を下げていった。

校長はしばし悩んだ後、花蓮にある紙を手渡した。

「それはフラソから届いた手紙だ……。本来なら完全に回復したお前に渡したかったが……。もう何も言うまい」

校長はそれだけ言って校舎に姿を消した。花蓮は校長を見届けた後、手紙に視線を移した。

遼は生きてる。もし返してほしければもう一度基地に来い、

花蓮は手紙を読むや否や、空を見上げた。周りにはヘリの音が響き、花蓮が見上げたと同時に、花蓮の頭上に校長が乗ったヘリが姿を現した。

「乗れ花蓮！遼君を助けに行くんだろ！」

花蓮は手紙を握り、くしゃくしゃにつぶした。そしてヘリからぶら下がる梯子に手をかけ、基地へと向かった。

＊

フラソはその頃ひもで縛られた遼を檻にいれ、2日前に戦った部屋でコーヒークップを傾けていた。そのフラソの身体には傷は一つもなく、花蓮のようにダメージを負ってはいない。

フラソは遠くから響くヘリの音を聞き、カップを置いた。

「来たわね……。よかったわね遼、見捨てられなくて」フラソは微笑を浮かべた。遼も笑う。

数分して、部屋の扉が開いた。その扉の先には花蓮一人。他の者はいないとフラソは確認した。

「来たわよ。さあ遼を返して」

「当然、嫌よ」フラソは首を振って言った。

「分かってるわ。私と決着をつけたいんでしょう？そんな展開を思いつくなんて漫画の読み過ぎよね」

「いいじゃない、懂れたって」

「ダメとは言っていないわよ。さあ、早く終わらせようね」

花蓮は微笑を浮かべて、腰にぶら下がった鞘から刀を抜いた。

「日本人なら、刀と刀で一本勝負。これがいちばんよね」

「日本人って・・・あなたハーフでしょ？」

「たとえばハーフでも、日本の心ぐらい持ってるわよ」

花蓮がしゃべり終わり、刀を構えると、フラソは座っていた椅子の後ろから幾つかの武器をどけて、刀を取り出した。そして刀を抜き、刀の刃を花蓮に向けた。

「最終決戦・・・。私に悔いが残らない戦いにしてね」フラソが笑ったと同時に、花蓮は走り出した。

花蓮は剣を振るった。金属音と共に、花蓮の攻撃はフラソの持っている刀によって阻まれた。

そこからの戦いを、遼はただ見守るしかなかった。言葉に表せないほどのつばぜりあいをくり返し、両者、斬っては切られの戦いを繰り返した。

二人が倒れた時には、あたりは血の海だった。遼は唾をのむ。

「・・・花蓮・・・」遼は心配そうに二人を見つめた。両者ともに起き上がらない。

「う．．．く．．」先に起き上がったのはフラソだった。なんどもよろけながらも立ち上がり、刀を拾い上げ、納めた。

「私の．．勝ち．．みたい．．ね」フラソはそう言って花蓮から背を向けた。そしてそのままゆっくりと倒れた。

「いや．．私の勝ちよ．．」花蓮は、瀕死のフラソに対し、あまりふらつかずに立ち上がって、刀を納めた。

「花蓮．．．」遼は声を出した。花蓮は遼を見た。

「心配しなくてもいいわ。フラソは生きてるから。まあ今回ばかりはちょっとやさっとじゃ起き上がれないほどのダメージだけど」

「なんで殺さないんだ．．？」遼は花蓮に訊いた。

花蓮は微笑を浮かべた。そしてフラソのポケットから檻のカギを見つけ、遼を救出した。

「ありがとな．．」遼が笑った。花蓮は遼の感謝の言葉を聞いてこやかに笑った後、遼に倒れこんだ。

遼は花蓮を受け止めた。花蓮は目を閉じ、眠っている。

「死んじやいないよな」遼は花蓮の顔を見て呟いた。そして優しく笑った。

「帰ろう。話したいことが沢山あるんだ」

遼は花蓮を抱き上げた。そしてフラソに近寄り、自分が縛られている縄でフラソを縛ると、縄を自分の腹に巻いた。

そして遼は部屋を後にした。

遼が基地のヘリポートにたどり着くと、一台のヘリコプターが止まっていた。ヘリコプターの前で校長が手を後ろで組んで笑っている。

校長は何もいわずヘリコプターに乗り込んだ。遼もその後を追うようにヘリコプターに乗り込んだ。

ヘリコプターは地面から機体を浮かした。

ヘリコプターの中で、遼は花蓮の顔を見て微笑を浮かべた。

ヘリコプターは学園に向かって飛び立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142t/>

ヒーロー&ヒロイン

2011年10月10日12時31分発行